

Title	中間言語における可能表現の諸相
Author(s)	渋谷, 勝己
Citation	阪大日本語研究. 10 P.67-P.81
Issue Date	1998-03
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/8066
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

中間言語における可能表現の諸相

Variation in Interlanguage

—the Case of Japanese Potential Expressions—

渋谷 勝己

SHIBUYA Katsumi

キーワード：中間言語、バリエーション、可能表現、OPI

1. はじめに

本稿は、OPI (Oral Proficiency Interview) の手法によって集められた横断的なデータ (鎌田-山内コーパス¹⁾、以下KYコーパスと呼ぶ) のなかから可能表現を取り出して、その習得・使用のありかたを分析することを目的とする。日本語中間言語にバリエーションをもたらすメカニズムをさぐる試みの一環を構成するものである。

2. KYコーパス

KYコーパスは、複数のテスターによって、OPIの手法 (鎌田1996など参照) を用いて行われた、日本語学習者90名に対するインタビューを、録音文字化したものである。インタビューは日本で行われたものがほとんどであるが、インフォーマントの出身国で実施された場合も若干交じっている。構成は以下の通り。

- (a) インフォーマントの母語：中国語・韓国語・英語
- (b) インフォーマントのレベル：初級 (5名)・中級 (10名)

上級（10名）・超級（5名）

(c) データの長さ：30分以内

母語については、出身国と必ずしも一対一で対応するものではない。またインフォーマントのレベルは、それぞれのテストの判断による。

本稿は、このKYコーパス全体の可能表現を、分析の対象とする。

なおOPIは、できるだけ自然な談話を収集することに配慮するが、基本的にテスト場面であることから、自然な会話のデータよりも若干公式度の高い形式が得られる可能性のあることは否めない。しかし他方では、得られたデータの総合的なレベルが専門家によって測定されているために、発達過程を正確にとらえやすいといったメリットももっている。

3. 可能表現

本稿では可能表現を、主に形式面から分析していくことにする。具体的には、表1～3の見出し項目に掲げた次の形式を取り上げる。カッコ内は表での略記。

(a) 助動詞(ラ)レル類 ((ラ)レル)

(a)–1 五段動詞+レル : 行カレルなど (五段)

(a)–2 一段・カ変動詞+ラレル : 見ラレルなど (他)

(b) 可能動詞類 (可能動詞)

(b)–1 五段動詞派生の可能動詞 : 行ケルなど (五段)

(b)–2 一段・カ変動詞派生の可能動詞 : 見レルなど (他)

(c) デキル類 (デキル)

(c)–1 スルコトガデキル : 行クコトガデキルなど (スルコトガ)

(c)–2 動名詞デキル : 勉強デキル・説明デキルなど (VN)

(c)–3 その他のデキル : 単独使用、勉強ガデキルなど (ー)

その他、可能ダといった形式 (例(1)) や、シヤスイ、シニタイなどの難易文 (例(2))、ムズカシイといった形容詞 (例(2)(3)) も、中間言語のなかで可能表現としての (に近似する) 意味・機能を担っていると思われる。

る場合がある。しかし、可能ダといった形式は使用頻度が少ないこと、また難易文・形容詞文は目標言語では可能文とは違う意味を表すこと、などを考慮して、本稿の分析対象からはずした。

(1) まあ別にどうしてもやりたいけど不可能だということはないと思いますけど (英上上7)

(2) T: 餃子の作り方教えてください

S: あーむずかしい。説明しにくい。あーよく知らない (英中下2)

(3) T: どんな仕事をしていましたか

S: 日本語でちょっと、むずかしいです (英中下2)

用例のあとのカッコ内注記は、最初の「中・韓・英」が母語、次の二つ(もしくはひとつ)がレベル、最後が話者番号を示す。また会話の引用の場合、Tはテスター、Sはインフォーマントのことである。以下同様。

4. KYコーパスにおける可能表現

まず、KYコーパスから得られた可能形式の用例数を整理しておこう。インフォーマントが使用した可能形式を、表1 (中国語母語話者)、表2 (韓国語母語話者)、表3 (英語母語話者) に示した。

表には、§3であげた形式の用例数のほかに、複合動詞の可能形についての情報も加えた (内数)。VテVのかたちをとるもの (Vは動詞。シテイケル・シテイラレル・シテモラエルなど) と、VVのかたちをとるもの (思イ出セル・言イキレルなど) にわけて表示してある。また動詞について異なり数と延べ数に違いがある場合には、異なり数を斜線の左に、延べ数を右に示している (「ーデキル」を除く)。先行するテスターの発話のなかにインフォーマントが用いた可能形式と同じ形式がある場合も、使用能力があると考えて用例数に含めたが、その数は全体で10例にすぎない。以下、これらの表から読みとれることを、三つの母語別グループに共通する特徴 (§4.1) と、インフォーマントの母語によって異なる部分 (§4.2) にわけて、見ていくことにしよう。

形式 話者	(ラ)レル		可能動詞		デキル			複合動詞(内数)		そ の 他
	五段	他	五段	他	スルコトガ	VN	-	VテV	VV	
中初下1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
中初中1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
中初中2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
中初上1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
中初上2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
初計(延べ)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
中中下1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	
中中下2	-	-	-	-	-	-	14	-	-	
中中下3	-	2/3	-	-	-	-	-	-	-	
中中中1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	
中中中2	-	-	-	-	-	-	1	-	-	
中中中4	-	-	-	-	-	-	5	-	-	
中中中5	-	-	1	-	-	1	3	-	-	
中中上1	1	2/3	2/3	-	-	-	2	-	-	
中中上2	-	-	2	-	-	-	-	-	-	
中中上3	-	-	2/3	-	-	-	-	1	-	
中計(延べ)	1	6	9	-	-	1	27	1	-	
中上1	-	1	1	-	-	1/2	4	-	-	
中上2	-	-	3	-	-	2	3	-	-	デキルダケ1
中上3	-	-	-	-	-	-	2	-	-	
中上上1	-	1	3/4	1	-	1	1	-	-	
中上上2	-	1	1	-	1	1	1	-	-	
中上上3	-	-	1	-	-	-	1	-	-	
中上上4	-	-	1	-	-	3	-	-	-	
中上上5	-	-	2	-	-	-	3	-	1	デキレバ1
中上上6	-	-	3	-	1	-	2	-	-	
中上上7	-	2	4/6	-	-	1	3	2/3	1	デキレバ1
上計(延べ)	-	5	22	1	2	10	20	3	2	
中超1	-	3	1	1	-	-	1	-	-	予測サレル1、推測サレル1
中超2	-	2	6/7	-	-	1	3	2	1	
中超3	-	4	4/7	-	-	-	1	1	-	デキレバ1
中超4	-	1/2	5/8	-	1	2	2	2/3	-	デキルダケ1
中超5	-	1	5/8	-	-	-	3	1/3	1	デキルダケ2、デキルカギリ1
超計(延べ)	-	12	31	1	1	3	10	9	2	
総計(延べ)	1	23	62	2	3	14	57	13	4	
使用率	0.6	14.1	38.3	1.2	1.9	8.6	35.2	-	-	

表1 可能表現の使用の実態(中国語母語話者:162例)

(数字が二つある場合、左 動詞の異なり、右 延べ:先行形式の有無は無視)

形式 話者	(ラ)レル		可能動詞		デキル			複合動詞(内数)		そ の 他
	五段	他	五段	他	スロトガ	VN	-	VテV	VV	
韓初下1	-	-	2/2	-	-	-	-	-	-	
韓初下2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
韓初中1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
韓初上1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
韓初上2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
初計(延べ)	-	-	2	-	-	-	-	-	-	
韓中下1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
韓中下2	-	1	1	-	-	-	-	-	-	
韓中中1	-	-	-	-	4	-	-	-	-	
韓中中2	-	-	-	-	-	-	1	-	-	
韓中中3	-	1	2	-	2	3	2	1	-	デキルダゲ1
韓中中4	-	-	1	-	4/5	1	3	-	-	
韓中中5	-	1	3/4	-	-	-	1	-	-	
韓中中6	-	-	-	-	-	-	2	-	-	
韓中上1	-	1	1	-	2	-	1	-	1	
韓中上2	1	-	-	-	2	1	1	-	-	デキルダゲ1
中計(延べ)	1	4	9	-	15	5	11	1	1	
韓上1	-	-	2/3	-	1	1	4	1	-	
韓上2	-	1	4	-	1	1	3	-	-	
韓上3	-	-	3	-	2	-	4	2	-	
韓上4	-	-	1	-	-	-	-	-	-	デキレバ1
韓上5	-	-	4/6	-	-	1	1	-	-	
韓上6	-	1	-	-	1	-	4	-	-	
韓上上1	-	1	5	-	1	1	3	-	2	デキレバ1、ビックリサレル1
韓上上2	-	-	1/4	-	3	-	-	-	-	
韓上上3	-	-	3/5	-	3	-	5	-	-	
韓上上4	-	1	7/8	1/2	-	1	6	1	2	
上計(延べ)	-	4	39	2	12	5	30	4	4	
韓超1	-	1	3/4	-	-	3/4	5	-	1	
韓超3	-	-	-	-	-	-	1	-	-	デキレバ1、デキルダゲ1
韓超6	-	-	4/7	-	-	2/4	5	-	-	デキレバ4
韓超7	-	3/4	2/3	-	-	2	2	-	-	理解サレル1
韓超9	-	-	2	-	-	-	-	-	-	デキレバ1
超計(延べ)	-	5	16	-	-	10	13	-	1	
総計(延べ)	1	13	66	2	27	20	54	5	6	
使用率	0.5	7.1	36.1	1.1	14.8	10.9	29.5	-	-	

表2 可能表現の使用の実態 (韓国語母語話者: 183例)
 (数字が二つある場合、左 動詞の異なり、右 延べ: 先行形式の有無は無視)

形式 話者	(ラ)レル		可能動詞		デキル			複合動詞(内数)		そ の 他
	五段	他	五段	他	スルコトガ	VN	-	VテV	VV	
英初下1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	
英初中1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
英初中2	-	-	-	-	-	-	1	-	-	
英初上1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
英初上2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
初計(延べ)	-	-	1	-	-	-	1	-	-	
英中下1	-	-	1	-	2	-	-	-	-	
英中下2	-	-	2	-	1	-	-	-	-	
英中下4	-	-	-	-	-	1/2	-	-	-	
英中下5	-	-	1	-	-	-	-	-	-	
英中中4	-	-	1	-	-	-	-	1	-	
英中中5	-	1	1	1	-	-	2	-	1	
英中中6	-	-	2	1	-	-	-	-	-	
英中中7	-	3	2	-	-	-	1	-	-	
英中上3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
英中上4	-	-	4	-	-	-	2	-	-	デキトラ1
中計(延べ)	-	4	14	2	3	2	5	1	1	
英上1	-	-	2/3	-	1	2	1	-	-	
英上2	1	2	2	-	-	1	-	-	-	
英上3	-	1	1	-	1	-	1	-	-	
英上上1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	
英上上2	-	1	5/8	1	1	-	3	-	-	
英上上3	-	2	3	-	-	4/6	2	-	-	デキルダケ1
英上上6	-	1	5	-	1	-	3	2	-	デキレバ2
英上上7	-	-	2/3	-	1	3/4	5	-	-	
英上上8	-	-	4	1	-	-	2	-	-	
英上上9	1	1	2	-	-	-	1	-	-	デキレバ8、デキルダケ2
上計(延べ)	2	8	31	2	5	14	18	2	-	
英超1	-	1	4	-	-	-	1	-	1	出サレラレル1
英超2	-	1	3	-	-	-	-	1	-	
英超5	-	2	1	-	-	-	4	-	-	
英超6	-	-	2	-	1	1	3	1	-	デキレバ2、デキルダケ5
英超7	-	2	2	-	-	-	-	1	-	デキルダケ1
超計(延べ)	-	6	12	-	1	1	8	3	1	
総計(延べ)	2	18	58	4	9	17	32	6	2	
使用率	1.4	12.9	41.4	2.9	6.4	12.1	22.9	-	-	

表3 可能表現の使用の実態(英語母語話者:140例)
(数字が二つある場合、左 動詞の異なり、右 延べ:先行形式の有無は無視)

4.1. 三つのグループに共通する特徴

まず三つの母語別グループに共通する傾向として、次の5点を指摘することができる。

4.1.1. 可能形式の使用開始レベル

どのグループでも、初級インフォーマントには可能形式の使用例がほとんどない(全体で4例のみ)。また使用している場合でも、次のような、連接上の問題を抱えているかに思われる例が観察された。

- (4) [日本の歌は好きかと尋ねられ] 話せ、話せ、言え、うー、うー
(韓初下1)

これは、否定形を使おうとして使えなかった場合であるが、同時に、単語の選択にも迷っている例である。

一方理解面での習得はかなり進んでいるらしく、

- (5) T: でも、少しは泳げるんですか
S: ええ、少し(韓初中1)

のように、適切に応答されている例が散見される²⁾。

可能形式は、形式間の使用度に違いはあるものの、いずれの母語グループでも、中級以降になって、生産的に使用されるようになる。

4.1.2. 助動詞(ラ)レルと可能動詞

次に、形式ごとの特徴を看一看にしよう。

まず助動詞(ラ)レルと可能動詞については、一段・カ変動詞で助動詞ラレル、五段動詞で可能動詞を使用するといった、規範に則った使い分けが広く見られる。逆にいえば、可能の意味を表すのに、五段動詞に助動詞レルを付加したり(例(6)(7)(8))³⁾、一段・カ変動詞に可能動詞(ラ抜きことば)を使用すること(例(9)(10)(11))はほとんどない(助動詞(ラ)レル類・可能動詞類の全用例中4.8%)。

- (6) 仕事中は、あまり、しゃべられません(中中上1)

- (7) 相撲は押しても勝ちでしょ? でもシルム [韓国ずもう] は倒さ

れなければならない(韓中上2)

- (8) 物価は安いですね、むこうは。ですから、うん、安く日本に、あの、売られると思うんです(英上上9)
- (9) 先生の教え、れるかどうかの問題(中上上1)
- (10) イタリアに行ってはもう何でも食べれました(韓上上4)
- (11) [郊外に出れば] 自然、肌で感じれるようなところ、あの、ありますので(英上上2)

KYコーパスのインフォーマント情報には、日本語を教室場面で習得したか自然場面で習得したかの別、あるいは具体的な在住歴等は含まれていないので、上の形式と居住地の方言との関連は指摘できないが、いずれにしても、教科書的なことばが習得されていることが理解できる⁴⁾。

なお、表では、どのグループでも「可能動詞・五段」が「ラレル・他」の用例数を大幅に上回っているが、これは、単純に、それぞれの活用タイプに属する動詞の語彙数とその使用頻度が反映したものであろう。可能動詞よりも助動詞ラレルのほうが習得が遅れるといったことは、本データからは指摘できない⁵⁾。

4.1.3. 「-デキル」の汎用

習得者言語に一般的に観察される「-デキル」の汎用(意味的過剰一般化)は、KYコーパスにも見出された。次のような例である。いずれも、具体的な動作を明示する動詞((12)受信スル・(13)飼ウ・(14)行クなど)が使用されず、可能であることだけがデキルによって述べられている例である。

- (12) 寮の談話室にある、テレビ、衛生放送もできて、外国のテレ、映画など、よく見ます(中中上1)
- (13) T: Sさんは中国の家ではペットを飼っていらしたんですか
S: 今ねー、あの、アパート住んでいる。あんまりできません
(中上3)
- (14) T: [そこへは] どうやって行けばよいでしょうかね

S : あの一ここからは、あーこのビルの前、前のほうでバスを乗って行くと、まあできると思います (韓上6)

この「一デキル」の汎用は、中間言語行動のなかでは語彙面での不足を補うコミュニケーション・ストラテジーとして積極的に活用される場合がある。上の(12)も、ポーズの多さなどから見るとモニターがかかった発話と考えられ、このようなストラテジーが採用された可能性が高い⁶⁾。

4.1.4. デキルによる分析表現化

デキルはまた、次のように、具体的な動作を表す動詞と共起して使われてもいる。

(15) T : どこに行きました ?

S : あれ、名前は、ちょっと一、んー、日本語で、よ、読んで、ちょっとできないから、[読めない、の意] (中中下2)

(16) 今日、でもやな、わたしちょっと日本語今しゃべるちょっとできますけど、(中中下2)

(17) あー今度 [二回目の日本滞在では] あの自分で京都市、いろいろなところに行く、できます (英中下2)

(18) [その映画の主人公は] 病気で、話すはできない (韓中中4)

いずれも可能形式を生産的に使い始める中級話者の発話例で、一方では可能動詞を習得する過程で動作部と可能部を分析的に表現した形式とみなすことができ、また他方ではスルコトガデキルといった分析的な形式を習得する過程で産出された形式だと解釈することができる ((15) (16) はこの話者のショットデキルのチャック性をもとに「一デキル」、(17) (18) はスルコトガデキルの例として分類した)。(18) を用いた話者には、

(19) その女 [映画の主人公] は、話すのはできないけど、すてきな才能があって、ピアノをひくことができます (韓中中4)

といった発話例 (目標言語形式) もある。

なお、デキルをめぐる汎用や分析表現化に関連して、上級話者の「デキル帰り」といった現象も指摘できる。習得が進んだ段階でも、(20) のよ

うに述語が複数の文法形式によって構成される場合には、デキルを用いて述語の構成を単純化するという操作（back slidingの一種）である。

- (20) 先生も一般の日本語をまあ、外国語をおしゃべりにできますか
（英上3）

4.1.5. 可能形式の過剰使用

最後に、目標言語ではふつう可能形式を使用しない場合に可能形式を用いているケースを整理しておこう。次のような例である。

- (21) まあ確かに十日間の仕事は一週間でがんばってやれるんですけど、
いつもこんなふうにやったらですね、なんか体力こーからだがもて
ないんですから（中超2）
- (22) 日本の政治とか、あれはもうあんまり話題になれない。あんまり
わからない、みんなが（英上上8）
- (23) いろんな考えがありますよね、どういうふうに授業を進めるのか。
で、うーん、うまく行けると、いいんですけどね（英上上9）

ガ格名詞句に非情物をとっていること（からだ・あれ(=日本の政治)・授業)と、日本語能力の高い話者の発話であることが、これらの例に共通する特徴である⁷⁾。

ここで可能形式が使われた理由としては、ひとつには母語からの転移ということが考えられよう（例 (21) (22) など⁸⁾。しかし一方ではまた、いずれの例も、ガ格名詞句の潜在力や資格を表す（例 (21) (22) ）といったことや、外的条件に支えられた実現への期待を表す（例 (23) ）といった点で、可能の意味に周辺的にかかわっているということも考慮しなければならない。もしこの意味的周辺性ということを中心とすれば、(21) ~ (23) はいずれも、それぞれの可能形式の担う意味が中間言語で拡大した、汎用の事例として捉えることができるであろう⁹⁾。

4.2. 母語別グループ間の相違点

次に、三つの母語別グループの間にある違いを整理してみることにしよう。

	可能動詞 助動詞類	デキル類		
		スルコトガ	VN	—
中初	—	—	—	—
中中	16	—	1	27
中上	28	2	10	20
中超	44	1	3	10
計	88	3	14	57
計	88(54.3)	74 (45.7)		
韓初	2	—	—	—
韓中	14	15	5	11
韓上	45	12	5	30
韓超	21	—	10	13
計	82	27	20	54
計	82(44.8)	101 (55.2)		
英初	1	—	—	1
英中	20	3	2	5
英上	43	5	14	18
英超	18	1	1	8
計	82	9	17	32
計	82(58.6)	58 (41.4)		

表4 可能動詞・助動詞とデキル類

表4は、グループ間の違いが理解しやすいように、表1～3をまとめ直したものである。以下のように統合した。

- (i) 各レベルごとに、インフォーマントの用例数をまとめた。
- (ii) 五段動詞と一段・カ変動詞については、どのグループでも相補的に、前者に可能動詞、後者に助動詞ラレルを使うことが多いので (§4.1.2)、両者をまとめて表示した。その点ではデキル類、特にVNデキルもサ変動詞

に対応して相補分布の一環を構成するが、グループによってスルコトガデキルと「—デキル」の使用のありかたが異なるために、そのまま区別して示してある。

表4からは、次のようなことが理解される。

4.2.1. 韓国語母語話者グループのスルコトガデキル

まず、韓国語母語話者グループに、スルコトガデキルの使用が多いことが目につく。このことの理由としては、母語からの正の転移ということが考えられよう。韓国語には、

- (24) 動詞-l(ul) swu iss- / eps-
 未来連体形語尾 kot al / nai
 「～すること (可能性) ある / ない」(直訳)

といった、スルコトガデキルに対応する分析的な可能形式があり、日常的によく使われる¹⁰⁾。

- (25) kukes-ul ilbone-lo selmyengha-l swu-nun eps- spnita
 ソレ ヲ 日本語 デ(具格)説明スル 語尾 コトハ ナイ 丁寧
 「それを日本語で説明することはできません」

- (26) pwukoki-nun cip-ese kantanha-key
 焼キ肉 ハ 家 デ(位格) 簡単ダ 語尾(副詞形)
 mek -ul swu iss-spnita
 食ベル 語尾 コト アル 丁寧
 「焼き肉はうちで簡単に食べることができます」

4.2.2. 習得ルート

次に、習得ルート（正確には使用ルート）について見てみると、上級レベルではその使用のありかたが類似しているものの、そこに至るまでの過程（中級レベル）では、次のように、三者三様の状況を呈している。

- (a) 中国語母語話者グループは、中級レベルで「-デキル」を多用し、徐々に可能動詞・助動詞に移行する様相を見せる。可能である動作が形式的には明示されない、文脈優先的な可能形式使用が、習得初期に観察されるということになる。
- (b) 韓国語グループでは、すでに §4.2.1 で見たように、「-デキル」のみではなく、スルコトガデキルの使用も最初から顕著である。
- (c) 英語グループは、韓国語グループとは逆に、五段動詞での可能動詞の使用が先行するかに見える。

各グループの可能動詞・助動詞類とデキル類の使用について χ^2 検定を行ったところ、中級で、英語・中国語グループの間に5% ($\chi^2=6.567$)、英語・韓国語グループの間に1% ($\chi^2=9.182$) レベルで有意差が確認された。上級にはこのような有意差はない。

このようにして各グループの中級インフォーマントには、語用論的使用（中国語）、転移的使用（韓国語）、文法的・形態論的使用（英語）とでも名付けることのできる傾向が顕著であることが理解される。

では、それぞれのグループにこのような傾向が見出されるのはなぜだろうか。

英語の可能形式は can、to be able to いずれも分析的であるから、可能動詞の多用は母語の影響とは考えられない。可能動詞をチャンクとして

使っているという可能性も考えられるが、その場合、なぜ英語グループだけがそうなのかが説明できない。現段階では、中国語グループの結果とともに、その説明を保留せざるをえない。これらのことには、それぞれの言語の可能文のみならず、形態論的類型や、談話構造・統語構造の類型などが、広くかかわっていることも考えられる。

なお、各グループが用いた可能形式の全用例数をくらべると、英語グループが少ないことが目に付くが、このことに（回避などの）意味があるかどうか不明である。

5. まとめ

以上本稿では、KYコーパスから得られた可能文を分析し、母語の違いを越えてどのグループにも、

- (a) 可能形式は中級以降に生産的に使用されること (§4.1.1)
- (b) 可能動詞と助動詞ラレルは規範的に使い分けられることが多いこと (§4.1.2)
- (c) 「-デキル」が汎用されることがあること (§4.1.3)
- (d) いくつかの可能形式の習得過程において、デキルによる分析表現が観察されること (§4.1.4)
- (e) 能力の高いインフォーマントに、可能形式が過剰に使われることがあること (§4.1.5)

といった共通する特徴があることを見出した。また同時に、インフォーマントの母語によって、

- (f) 韓国語母語話者はスルコトガデキルを多用すること (§4.2.1)
- (g) 各グループには独自の習得ルートがあること (§4.2.2)

といった違いがあることを明らかにした。

- (g) の各グループの習得ルートに対する説明は、今後の課題である。

[注]

* 本稿は、平成9年度文部省科学研究費補助金・基盤研究(A)(1)「第2言語としての日本語の習得に関する総合研究」(研究代表者：カッケンブッシュ寛子、課題番号08308019)の研究成果の一部である。

1) 鎌田修(京都外国語大学)、山内博之(岡山大学)両氏を中心にして作成された。本稿はVersion1による。

2) ただし、次のように、可能形式に対して単純形式で応答するといった例は、レベルがあがっても観察されるところである。

(i) T: Sさんはピアノがひけますかー

S: あ、ひきません(中中中1)

3) 可能以外の助動詞レル形には、受け身・尊敬のほか、表の「その他」に示した、自発と解釈できる例があった。

4) ラ抜きことばが頻用される愛媛県松山市に住む話者の次の例などは、方言の影響が考えられる。

(ii) 一応アメリカで仕事探します。でも、まあ、何かいい仕事あまり見つけれない(英上上8)

5) 幼児の母語獲得過程においては、助動詞ラレルの獲得は可能動詞および「ーデキル」の獲得に遅れ、獲得の過程に書ケラレル、デキラレルのような過剰一般化形式が現れることが知られている(渋谷1994など)。

6) 「ーデキル」の汎用の確かな例は、KYコーパスでは日本語能力の高いインフォーマントに多かったが、これは偶然であろう。汎用とはそもそも、少なくとも一人の話者の言語能力が限られている場面で典型的に観察されるコミュニケーション行動のひとつである。日本語能力の低い話者の「ーデキル」の汎用については渋谷1995参照。

7) (23)は話し手が動作の主体となっているとも解釈できるが、その場合は可能文の問題というよりも動詞の語彙選択の問題となる。

8) (21)について、「(からだが)もたない」は中国語では、「支持不了」(『小学館日中辞典』)、「受不了」など、「…しきれない」という可能の意味をもつ「-不了」で表される。水野義道氏のご教示による。

- 9) 先に § 4.1.3 で述べた「ーデキル」の汎用は、可能形式で表される意味が一定で、それを表す形式が「ーデキル」に一本化されるという事象であった。
- 10) 生越直樹氏のご教示による。

引用文献

- 鎌田修 1996 「OPI」 鎌田修・川口義一・鈴木睦編著 『日本語教授法ワークショップ』 凡人社
- 渋谷勝己 1994 「幼児の可能表現の獲得」 『無差』 創刊号 京都外国語大学日本語学科
- 1995 「旧南洋群島に残存する日本語の可能表現」 『無差』 2 京都外国語大学日本語学科

(文学部 助教授)